



TITLE:

<大會抄録>明清時代の包攬について

AUTHOR(S):

西村, 元照

CITATION:

西村, 元照. <大會抄録>明清時代の包攬について. 東洋史研究 1975, 34(3): 452-452

ISSUE DATE:

1975-12-31

URL:

<https://doi.org/10.14989/153591>

RIGHT:

大會抄錄

明清時代の包攬について

西村 元照

包攬とは元來、税糧納入の代理行爲と徴税の請負行爲を指して居り、南宋頃の攬納や、元代の結攬等を経て、明代以後、包攬と呼ばれたものである。代理又は請負に際し、何がしかの利鞘が稼がれたため、元代から既に屢々禁ぜられ、『明律』や『清律』にも嚴罰の規定がある。

建前として禁ぜられていたためでもあらう、明中期から盛んになる包攬では、もっぱら無賴漢（棍徒等）が擔當し、納税者を巧みに騙す形態で展開され、明末には南京等の大都市に歐家が登場する。

清初になるとかかる歐家は殆んど江南各縣（城）に存在するようになる。郷紳、商人、胥吏、棍徒等が分業しつつ連帶して、例えば歐家のような共通の場を據點に、包攬を自由自在に行つた。徴税臺帳の私物化、保證人（金）制、地域割り、納期の操作、領收證の先買、米色等の操縦、追徴、包攬業務の家業化と、世襲化等々に見られるように、むしろ包攬を通してでなければ納税出来ないような、事實上の徴税體制が出来つつある。つまり包攬を通して税糧徴収が、義務（對國家）から權利（對農民）に變化し、公（課）權を私的に所有（分有して操作）し行使できる階層（郷紳・商人層等）が形成されたことを意味する。

道光咸豐期以後顕在化する浮糧問題は、かかる階層分化の當然の歸結でもあった。そしてむしろ注目すべきは、かかる請負課税形式が、流通税・商税の分野（例えば釐金や諸捐税等）で益々増加したばかりでなく、請負制（一括請負いと莫大な中間搾取）そのものが、社會的分業の諸分野（例えば生産過程に於ける包身工制の如きに到るまで）に蔓延した。かつて柏祐賢氏にかかる現状を總括して「包的經濟秩序」と規定し、古來中國固有のものだらうと推測された。しかしむしろ、明末清初期以降、封建再編成の趨勢下に、その上部構造としての「郷紳制」の擡頭と供に登場した、歴史的經濟體制と見做すべきであらう。

年羹堯斷罪事件の背景について

大谷 敏夫

雍正三年に發生した年羹堯斷罪事件を通して清朝獨裁君主體制下における官僚機構の特質を考察する。この事件が宮廷内部における朋黨問題と關連していた經過については、既に孟森「世宗入承大統考實」（『清代史』所收）に詳細な研究があり省略する。但し孟森氏はその考察を専ら宮廷内部の朋黨關係に限定した故、地方督撫權力における朋黨問題には殆んどふれていない。そこで筆者は、年羹堯斷罪の政治的理由となつた「結黨營私」の實態を明らかにすると共に、雍正期に何故「朋黨の禁」が強調されたか、その背景をも併せて考察する。雍正帝は君主獨裁政治を確立するため「用人」と「理